

## 出土資料で解き明かす 屈原の誕生日

成家 徹郎

中国戦国時代の詩人・屈原の生年については古くから諸説あり、確定していなかった。

私は、近年出土の馬王堆帛書「五星占」がこの研究に決定的意味を持っていることに気づき、これを軸に研究を進めた。そして誕生日の確定に成功した。屈原の誕生日は紀元前340年、正月庚寅の日（西暦2月28日）である。

### 屈原の死去の年

端午の節句の5月5日は民間では、屈原が死去した日ということになっている。これが事実であったかどうかについては、確実な資料がないので知りようがない。死去した年に関しても、『史記』は何も書いていない。しかし彼の文学作品と当時の楚国の状況を併せて考えると、ほぼ察しはつく。

屈原は懷王にうとんじられて政治の世界から追い出された。その間に秦に騙されるようなかたちで楚国がだんだん衰退していった。あげくの果て、懷王は秦に軟禁されて、その地で死去した。懷王の後に立った頃襄王は懷王よりもっと愚か凡庸だった。令尹子蘭、上官大夫らが屈原をおとしめる進言ばかりを聞き入れた。そして屈原をひどく嫌い憎むようになり、ついに“遠遷”（王都から追放）した。屈原は江南（長江より南の地）に放浪した。そして湖南省汨羅県あたりを歩いた。その具体的時期は頃襄王7年、紀元前292年である。まさに頃襄王は父懷王の屈辱を反古にして、秦と婚姻関係を結んだ時期の直後であったろう。「哀郢」はその時期にうたった作品である。

天のところに常はなく

大衆はなにゆえかくも悲惨な目に遭うのか

民はみな離散放浪し家族は別れ別れになる

仲春（旧暦2月）の時期に東方に移動した

この四句については昔からいろんなたくさんの解釈が出されていた。しかし（清）王夫子の説が詩の本意にかなっている<sup>(1)</sup>。彼はこう言っている。第一句は、天のところがしっかりと一定することなく、定まらない、ということ。だから、時には楚に味方することがない。頃襄王は秦を恐れ、郢をすてて東方に逃げ、陳に遷った。

だから、この詩の首四句は秦の將軍・白起によって郢が陥落させられた時のことをうたったのであり、楚国が東遷し、人民が流浪した状況を描いている。

またある研究者は、この詩によって次のように推測する。

屈原はもともと、早くに政界から追い出されていた。秦軍が郢に進軍した時、屈原もじっとしておれず、楚軍の力になって働きたいという思いから郢に帰ってきたかもしれない。しかるに依然として政界の中樞から排除されて、何ら貢献するところなく終わった。だから郢が陥落した時、彼は一般大衆とともに流浪の旅を続けた。

おそらくこの推測は当たっているだろう。屈原の死は単に政治上での絶望のためばかりでなく、さらに重大な要因は、秦軍の南下である。白起が郢を落とした後、引き続き、兵を二つに分けて2方面から楚地を攻略した。そのうちの一つは、洞庭湖地区と江南地区であった。汨羅は当然その地に含まれる。この時期はまさに頃襄王21年（前278年）であった。屈原はもうとっくに入水の覚悟を決めていた。ただ秦軍が攻め込んできたので、速やかに決行することになったのである。楚国を復興するために貢献したいという熱情があふれるほどなのに、何の力にもなれない。そればかりか、もはや明らかに滅亡の道を進んでいるではないか。だが滅亡をその目で実際に見るには耐えられない。

屈原は川の畔に佇み、辞世の賦「懐沙」をよんだ。司馬遷はこう書いている。

“そして石を抱きて、ついにみずから汨羅に沈み、もって生命を断つ。”

郭沫若も上に述べた状況によって死去の年を278年と考えた。彼のこの説に対して、目加多誠はこう述べた。

“郭沫若がやはりこの哀郢を、その時の惨状に結びつけ、かつ屈原はこのとき漢北に居たが、圧迫されて南下して遼湘地方（遼、湘ともに川の名）に来て、ついに亡国の悲しみと憤りに死をえらんだ、とするのは、思うにその当時日本軍の中国侵略が日に日に盛んになった状況に激するところがあったからにちがいない。”（『屈原』<sup>(2)</sup>）

F. テーケイもまたこう述べている。

“屈原は、なぜ秦に行くことができないのか？ この問いには、屈原の祖国愛をもって答えるのがふつうである。屈原を祖国愛の詩人とみなす郭沫若もこのモーメントを誇張しすぎている。これも、抗日戦争時代には、それなりの意義があったであろう。しかし、私たちは、屈原の詩芸術において、祖国愛に中心的意義を与えることはできない。ことに、当時の社会の発展段階では、国家（ナチオン）はもちろん、民族（フォルク）も、歴史的意味において、まだ存在せず、祖国愛の内容は、後世のものと全く異なっている。（『中国の悲歌の誕生—屈原とその時代—』<sup>(3)</sup>P. 200）

両氏の意見に確かにもっともなところがある。郭沫若に、屈原の時代と今を重ねて見る気持ちが多少は働いたかもしれない。しかし、客観的歴史的状況と「哀郢」によって、屈原は前278年に入水したと判断してよい、と私は考える。

## 誕生の日付

死去の場合と異なり、その誕生の日付については、彼はその作品「離騷」の冒頭に明記している。ただ、その解釈がやっかいなため、彼の誕生日に関していろいろな説が出ている。

### 「離騷」首八句の解釈

屈原の誕生日に関する直接的資料は「離騷」だけである。そこでまずその出生を述べている首八句を詳しく見ていこう。

帝高陽之苗裔兮（帝高陽のずっと後の子孫である）

朕皇考曰伯庸（わが大いなる父君は伯庸という）

攝提貞于孟陬兮（攝提格はちょうど正月にあたる）

惟庚寅吾以降（ああその庚寅の日に、我は降臨した）

皇覽揆余于初度兮（聡明なる王は余の才能をさとく認めた）

肇錫余以嘉名（そこで、占いによって余によき名をたまわった）

名余曰正則兮（余を名づけて正則といい）

字余曰靈均（余にアザナをつけて靈均といった）

従来この首八句については一般に誤解されているところが少なくない<sup>(4)(5)(6)</sup>。よって以下、すこしコメントを加える。『史記・楚世家』に“楚の先祖は端顛高陽より出ず”とある。この記述は間違っているのだが、漢代の人・王逸はこの考え方に基づいて、この句は屈原が、自分は楚と先祖を同じくする、と誇っているのだと説明している。この説明も当然間違っている。董楚平は従来の間違いを正した<sup>(7)</sup>。漢代の文献では端顛と高陽は同一人物を指すとしているが、戦国時代の文献では、それぞれまったく別の人物になっている。『左伝』によれば楚族がまつた族神は鬻熊と祝融である。（董楚平『楚辞訳注』P. 304）前者は人祖であり、後者は大火（アンタレス）の人格化した表現であり「炎帝」と呼ばれることもある。戦前、湖南省長沙で発見された「楚帛書」では、炎帝と帝俊が彼らの神話の中で最高位にある<sup>(8)(9)(10)</sup>。そこに高陽は見えないが、屈原が「離騷」の中でこれに“帝”を付けて呼んでいるから、これも楚族の中の最高神の1人に違いない。（「楚帛書」によれば「祝融」は「炎帝」の補佐官である。）

古代中国は大火という天体を特別に重視した。だから古代文献の中で天体に関しては大火の記事が1番多い。文献ばかりではない。近年、西安交通大学構内で発見された28宿壁画でもこのことが証明された。この壁画では星はみな白色で描かれている。しかし、大火（心宿）だけは紅色で非常に目立つように描かれてあった。古代の中国人はなぜ大火を重視したか。それはこの星が農耕活動の開始を告げる指標の役割を果たしたからである。個人が暦を

持っている時代ではない。またマスコミのような伝達手段は存在しない。農民は天体を見て季節のうつり変わりを知り、それに基づいて農作業を進めた。世界中どこでも、古代において天体は暦だった。ただどの天体を指標にするかは、地域によって異なる。中国大陸では永い間、大火に基づいて暦を作った。(中国では「火暦」と呼んでいる。私は「大火暦」と呼ぶ。) 文献によれば、古代国家には重要な官として「火正」があった。「火正」とは、大火を観測して時を正す、という意味である。甲骨文によれば、当時は12月あるいは正月が農耕開始の時期だった。これらの暦月をいわゆる三正(周暦、殷暦、夏暦)のどれかと解釈しては時期が合わない。しかし大火暦ならちょうど春の季節に当たり、暦月と農業記事はうまく合う。また先秦文献や金文資料の中にも、三正では矛盾するが、大火暦で考えるとうまく解釈できる記録がたくさんある。この暦について私は別の場で詳しく述べたのでここではこれ以上述べない<sup>(1)(2)</sup>。

屈原が“高陽”を持ち出したのは決して、自分は楚の王族と祖先を同じくする、と誇っているのではない。残念ながら高陽は古い文献の中であまり詳しく書かれていない。ただ確かなことは、高陽はもとは長江流域で広く崇拝されていた諸神の一つであった点である。おそらく一般には、楚の族神より高く評価されていただろう。屈原はその高陽こそ自分の始祖だと考えていた。

“攝提貞于孟陬” 従来この句を正しく理解できなかつたので、誕生年に対する考察を誤った。“攝提”は“攝提格”のことで、ここでは韻文だから字数をそろえるために「格」字を省略した。『詩経』の多くが各句同字数であるのと違って、「離騷」は各句が7字と6字を交互に繰返している。この形式についてF. テーケイはこう述べている。

“次にもうひとつ、屈原の詩体について一言することが許されるならば、「離騷」においても他の作品においても、屈原の詩行が、多く、リズム上の見地から二つの、しばしば等しくない部分に—「兮」をへだてて一分かれている事実が注目される。これは、あたかもギリシャやサンスクリットの詩のリズムにおけるのと似た方法で、主観と客観の間、叙事詩と抒情詩の間を、

つねに動揺する、悲歌の二つの局面から成る性質、2大部分から成る構成、それに対応するもののように思われる。”

（『中国の悲歌の誕生—屈原とその時代—』<sup>(3)</sup> P. 208）

摂提格はインドの木星占星術に由来する語である（後述）。木星は12年で天上を一周すると考えられていたから、各年にそれぞれ対応する占い用語が一つあり、全部で12語ある。摂提格はその1番目の語である。これら12語が系統的に全部記述されている文献はみな漢代に入ってから成立したものばかりである。そしてここでは、すっかり木星紀年法の意味で記述されている。ただ『史記・暦書』（紀元前100年ころの著作）ではまだ干支とは結びついていない。しかし『史記・天官書』、『淮南子』、『爾雅』は干支に対応するものとして記述している。「離騷」の時代はまだ木星占星術の時代で、干支とは何の関係もない。ここでは木星が、摂提格と呼ばれる位置にある年を示している。

“貞”字も従来誤解されてきた。しかし近年における文字資料の出土によって貞字の出現過程が明らかになった。「貝」の上に「卜」をつける貞という字形はそもそも誤解から生じた字である。本来「貝+卜」という字形は存在しなかった。この貝字はもともと鼎字であった。だから「離騷」も屈原が書いた時の字形は「鼎+卜」という字形であった。この字形は周代金文に頻繁に現れる。ところが、戦国時代は字形が激しく変動した時代である。鼎字の脚の書き方も実にさまざまで、画数が多いものもあり少ないものもある。そしてすくない例では、筆画がたて線2本だけになった。つまり貝字と同じ字形になってしまったのである。（楚簡には、脚をすっかり省略した「目+卜」の字形さえ見える。）そこで漢代になると「貝+卜」の字形と思われてしまった。こうして貞という字形が出現した。貞字がテイという音を持つのは鼎字に由来する。卜字や貝字からテイという音は出てこない。鼎字の脚が簡略化されて貝字になってしまった例は他にもある。「賚」、「貝」、「則」これらに含まれる貝字は、金文などの古い文字資料ではみな鼎字になっている。戦国時代に「鼎+卜」として書かれていた字形は、漢代になってから、みな

貞字に変えられた。だから現代に伝わる、漢代以前に成立した文献に見える貞字は、もとはみな「鼎+ト」という字形だった。本稿は印刷の都合上、それをみな貞字で表す。ところでこの貞字の意味はなんだろう。「離騷」の貞字と同じ用法は『尚書・洛誥』に見える。そこには“我二人共貞”とある。この中の“2人”は周王朝の確立に功績のあった周公と召公を指す。そして“貞”は「当たる」の意味である。そこでこの句は次のように訳されている。

「我々2人は一緒に、洛陽に都を建設する事業に当たる。」

「離騷」の貞もこれと同じ意味である。（「當」の字形はおそらく戦国時代後半にできた。それまではずっと「ト+鼎」の字形がその意味で使われていた。）“孟陬”は楚曆（夏曆。日本の旧曆と同じ。）の最初の月である。「陬」は戦国時代に書写された「楚帛書」にも見える語で、また『爾雅』にも「月名」の第1番に挙げられている<sup>(13)</sup>。そこでこの一句はこういう意味になる。

木星紀年法の第1番目の年・摂提格の年で、またちょうど暦月の第1番目の月に当たる。

“降”についても誤解している人が多い。たとえば目加田誠は第4句をこう訳している。“庚寅の日に私は生まれた。”従来、多くの楚辞研究者はこのように“降”を「生まれる」の意味に解釈してきた。しかし董楚平<sup>(7)</sup>や曲徳来<sup>(14)(15)</sup>が指摘するように、降字は「生まれる」の意味ではない。甲骨文の降字は階段（あるいは梯子）と足2つから成る会意字である。

小南一郎は、甲骨文の「陟」と「降」の字形を紹介して、その字義を説明している。（図1参照）

“中国の古い甲骨文字や金文の字体では、登り降りの意味する「陟」「降」などの字は梯子段と足跡で表わされる。この梯子段が単なる梯子段でなく神聖なものであったことは、祭祀に関係する語の構成部分としてこれが出現することからも知られる。おそらく陟降の字も、もともと神（すなわち巫覡）の、神聖な梯子を伝っての天界と地上との行き来を意味したものであろう。

この梯子段はほとんどの場合3段で表わされることから考えれば、こうした文字が形成されたころ（殷の安陽期以前）、天が三層から成ると考えられ

ていたであろうことを推定することができる。ずっと時代が下った長沙帛書にも三天の語が見えている。”（『楚辞』中国詩文選6<sup>(6)</sup> 100、101頁）

「陟」と「降」は、上と下の間を移動する意味である。甲骨文以降もずっとこの意味である。戦国時代の文献はもちろん出土文字資料の中にも降字が「生まれる」の意味で使われている例はない。「離騷」の他の個所でも「降」が使われている。「陟」も見える。そしてそれらはみな明らかに、上に述べた意味で使われている。

（曲徳来は先秦文献の中のたくさんの用例を挙げて説明している。『屈原及其作品新探』）だから「離騷」第四句の降字もとうぜん「降りる」と解釈すべきである。小南一郎は、せつかく「降」字を正しく認識したのに、なぜか伝統的解釈に疑念を抱かなかった。屈原は『詩経・玄鳥』に見える表現“天命玄鳥、降而生商”（天は玄鳥に命じた、そこで玄鳥は地上界に降りて商を生んだ。）をまねたのは明らかである。（董楚平『楚辞訳注』P. 312）屈原は、自分は決して生身の身体（母）から生まれたのではなく、天上から降臨したのだと主張しているのである。こう解釈してこそ、楚王の先祖と同じではなく、帝高陽の流れをくむ、と誇った首句の表現と呼応するし、「楚辞」の世界にもうまくマッチする。ところで、曲徳来は、“降”を他動詞と考え、“神を降ろす”と解釈している。しかし私はこの個所の“降”は、前後関係を考慮すると、“吾”を主語とする自動詞にとるべきだと考える。

第五、六句も間違った解釈が広く行われている。“肇”はかつて聞一多が指摘したように兆字と同じで、占いを行ってその名を決めたのである<sup>(16)</sup>。

### 『史記・曆書』の歳名

屈原の誕生年を求めるキーワードは“攝提（攝提格）”である。これは「曆書」によれば12個で一セットになっている歳名の第一の語である。「曆書」には以下のように記述されている。

#### 歳名

焉逢・攝提格（この年が太初元年、紀元前104年である。）



端蒙・単闕  
游兆・執徐  
彊梧・大荒落  
徒維・敦牂  
祝犁・協洽  
商橫・涒灘  
昭陽・作鄂  
橫艾・淹茂  
尚章・大淵獻  
焉逢・困敦  
端蒙・赤奮若  
游兆・攝提格

(以下、干支と同じ仕組みで繰り返す。)

『爾雅・釈天』によれば上の語はそれぞれ、歳陽と歳名の組み合わせである。「釈天」は次のように記述している<sup>(13)</sup>。

“歳陽：太歳在甲曰闕逢（太歳が甲にあるときを闕逢という）、在乙曰旃蒙（乙にあるときを旃蒙という）、… …”

“歳名：太歳在寅曰攝提格（太歳が寅にあるときを攝提格という）、在卯曰単闕（卯にあるときを単闕という）、… …”

上記二書とほぼ同時期の『淮南子』にもこれらの語は見える。そこでは次のように記述されている。

“太陰在寅歳名曰攝提格（太陰が寅にあるとき、歳名を攝提格という）、太陰在卯歳名曰単闕（太陰が卯にあるとき、歳名を単闕という）、… …”

“攝提格之歳、歳早水晩早稻疾、蚕不登、菽麥昌、民食四升。寅在甲曰闕蓬。（攝提格の歳、この歳は早い時期には水がたくさんあるが、おそい時期になると水不足になる。蚕は成らず。マメとムギはたくさん穫れる。民は4升を食す。寅が甲にあるとき闕蓬という。）単闕之歳、歳和稻菽麥蚕昌。民食五升。卯在乙曰旃蒙。（単闕の歳、稲マメムギ蚕みな盛ん。民は5升を食

す。卯が乙にあるとき旃蒙という。) … …”

歳名の全く漢語らしからぬ特殊な語の意味は分かりにくい。これらの語は二つの特徴を持っている。各語の一字一字の意味を考えてもその語の意味を理解することはできない。例えば摂提格とか単闕の摂字や単字の意味をいくら考えてもおそらく摂提格や単闕という語の意味を理解することは出来ないだろう。もう一つの特徴は、同一の語を表すのに書物によって異なる字が用いられている例が少なくない点である。そして字は異なってもその音（読み）は互いに共通する。例えば「曆書」の焉逢は『爾雅』では闕逢とし、『淮南子』では闕蓬となっている。「曆書」の作鄂は『淮南子』も同じであるが、『爾雅』は作噩とする。「曆書」の淹茂は『爾雅』では闔茂とし、『淮南子』では掩茂とする。

これらの特徴は、非漢語のコトバを音写表記（いわゆる「あて字」）したとき現れる現象である。だから歳名は非漢語のコトバに由来することは間違いない。ところが現代中国（主に大陸）の研究者は、外国の影響を受けた事実を認めたくない傾向が強い。だから歳名についても深く追究しなかった。そして漢代に成立した文献のみに頼ってこれらの意味を解釈した。よって屈原の誕生年に対する従来の研究はみな、根本的に間違っていた。以下、従来の主な研究を簡単に紹介しそれらの問題点を指摘する。

1. 紀元後100年ころに書かれた『漢書』の「天文志」にこういう記事がある。“太歳在寅曰摂提格、歳星正月晨出東方”（太歳が寅にあるとき、摂提格という。歳星が正月夜明け前に東方に出る。）これによれば、摂提格は寅年であるから、屈原の誕生年は寅年ということになる。そこで現代の干支から逆算して紀元前四世紀なかばころにその年を求める。ところが十二支紀年法あるいは干支紀年法は漢代になってから始まる。それ以前は、年に干支を当てる方法は存在しない。

2. 木星紀年法と十二支配当を適用して考察する方法で、郭沫若がやった方

法である。『爾雅』に“太歳在寅曰攝提格”という記述がある。ここで太歳について説明しておこう。木星（歳星）は12年で天上を1周すると考えられていた。このはなはだ都合のよい周期ゆえに年を表記するのに用いられた。ところでこれとは別の方面の必要から、天上に十二支が配当されていた。（図2参照）天を、北極を中心として12等分し、それぞれに十二支の一つを配当した。その順序は天の日周運動に合わせている。だから、天上の十二支が子・丑・寅と進む方向と木星が進む方向は互いに逆向きになっている。天上の十二支はおそらく、配当の風潮が盛んになった紀元前7、6世紀ころ成立したと思われる。ところで“太歳”だが、『爾雅』に見える“太歳”は十二支の順に1年に1つ進む。（「天官書」は“歳陰”と呼んでいる）これは間違いなく歳星に由来する語だが、当時の文献は詳しく説明してはいない。そこで後の中国人は「天官書」の記述をもとに、以下のように解釈した。

中国人は何でも干支と関連づけたいと考える。だから、木星が天上の十二支と逆の向きに動く状況は非常に困った問題だった。そこで前漢時代の人々は太歳（歳陰）という架空の天体を設定した。これは、木星の写像である。だから木星と反対の向きに進み、十二支の方向と一致する。もちろん12年で1周する。これで太歳の運行に十二支を対応させることが可能になった。こうして、いわば十二支紀年法というものが出現した。もちろん漢代になってからのことである。中国人はこれだけでは満足しない。さらに十干も結びつけたい。そしてついに干支紀年法が成立した。しかし『史記』や『淮南子』の時代にはまだ干支紀年法は成立していない。

漢代の人々は、太歳という概念が出現した本当の由来について分からなくなっていたから、木星の写像だと誤解した。太歳が出現した事情を正しく解明した人はジョン・チャルマーズであった。（この先で紹介する）

上に述べた事情をよく理解していない郭沫若は単純に歳名と十二支を対応させて考察した。秦代に書かれた『呂氏春秋』に“維秦8年、歳在涪灘”という記事が見える。この“8年”は始皇帝の8年で、紀元前239年であるこ

とが分かっている。また涸灘は十二支の申に当たる。これから逆算すると紀元前341年が寅年（つまり摂提格）になる。ところがこの年の正月（寅月）には庚寅の日がない。そこで「歳星超辰」という考え方を取り入れる。木星の実際の周期は12年より少し短い。だから長い期間（たぶん数百年）を経ると十二次との間にズレが生じる。そこで十二次の1つを省く（跳ばす）必要が出てくる。これが「歳星超辰」の概念である。この考え方によって1年跳ばすと、前340年が寅年になる。この寅月（正月）7日が庚寅の日である。

この方法の間違いは2点ある。1つは、木星紀年法と十二次を結びつけたこと。もう1つは、「歳星超辰」の概念を持ち込んで1年ずらしたこと。「歳星超辰」は十二次の各1つが1年づつに当てられて、それから100年くらい経過した後に生ずる現象である。しかし戦国時代の「歳星紀年法」は、歳星が実際に居るところの次（じ）によって年を表示する方法である。戦国時代のことにはこれを適用するのは明らかに間違いである。

古代天文学の専門家・陳久金は郭沫若の間違いを指摘した<sup>(18)</sup>。その中で帛書「五星占」に言及していながら、それを「離騷」と結びつけて考察する方法に思い及ばなかったのは、私には不思議に思われる。歳星紀年法について正しい認識を持っていなかったためかもしれない。

### 3. 浦江清の方法

歳星（木星）紀年法に基づいて推算する<sup>(19)</sup>。ところが、木星紀年法について根本的にかんちがいしている。彼は歳星紀年法の「超辰」という概念を考えた。彼はこう述べている。“歳星紀年は木星の位置にもとづいて年名を決める。木星が天上を運行する速さは、12年でちょうど1周となるのではなく、それより少し速い。その差が、ある期間を経ると積もり積もって一宮を跳ばす（省く）ことになる。よって、太歳紀年法では、その年名を1つ跳ばす必要がある。そうして初めて歳星の運行と一致させることができる。これを「太歳超辰」という。これに対して、干支紀年法には超辰がない。”

これは考え方が根本的に間違っている。歳星紀年法とは、どこまでも木星

の位置を見て、その位置に対応する年名を言う方法で、木星占星術と不可分の関係がある。木星の位置によるのだから、「超辰」という概念が入り込む余地がない。

また、摂提格、単闕などを彼は「太歳年名」と解釈している。しかし、戦国時代中期には太歳という架空の天体はまだ設定されていない。十二支との対応を真剣に考えたとき、窮余の策として太歳というものが考え出された。機械的に12年で一巡する「十二支紀年法」と、木星紀年法を対照したとき、100年くらい経つと両者の間に一つのズレが生ずる。このズレを調節する方法が超辰である。きれいに12年で一巡する太歳紀年法は戦国時代末期になってから始まる。超辰という概念は当然、その後で出現する。木星が天上を1周する周期がぴったり12年にはなっていないため、歳星紀年法は、紀年法としては不完全である。この欠陥を救うために十二支紀年法が考え出された。

他に、天上には古くから「十二次」という概念があり、これも木星紀年法に用いられた。(図2参照) 木星の通り道である黄道を12等分し、その一つ一つに固有の名前を付けた。戦国時代の文献に“歳在星紀”という記述がある。ここに見える“星紀”は十二次の一つである。これは、“木星が星紀の次(じ)にある時”という意味である。十二次は遅くとも春秋時代には成立していた(紀元前6世紀以前)。これも、木星の位置によって年を示す方法であり、十二次はそのために考え出されたものである。そしてまた木星占星術と不可分の関係にある(占星術の方が主な用途だったろう)。ただし、「離騷」『呂氏春秋』に見える木星紀年法とは直接的関係はない。

浦江清は「歳星超辰」という概念を用いて、木星の位置を推算し、屈原の誕生日を求めた。それは以下のような日付である。

紀元前339年正月14日庚寅。西暦で言うと2月23日である。

#### 4. 湯炳正の方法<sup>(20)</sup>

「離騷」の“摂提”を、木星を指すとする。そして、第3句をこう解釈する。

木星が正月に東の地平線上に見える時。

そして、この天象に合う日付を求めると紀元前342年正月26日になる。

湯炳正の方法の最大の誤りは、摂提を木星としたことである。「離騷」の摂提は摂提格のことで、どこまでも木星紀年法の用語のひとつであり、その第1年目のことである。

### 中国歳星紀年法の由来—ジョン・チャルマーズの考察—

歳名や歳陽はどう見ても漢語らしくない。そこでかなり早くから、この語やこの紀年法の由来を探求した人がたくさんいた。その中で、私は古代インドに由来するという説が正しいと考える。1865年にジョン・チャルマーズ (John Chalmers) は「古代中国の天文学について」を発表し、インド起源説を主張した<sup>(21)</sup>。彼は十二支紀年法の出現について鋭い考察をした。少し長い重要なので以下に紹介する。

中国の紀年法は東周時代まで混乱していた。そして、紀年にサイクルを利用する方法は、先秦時代より後になるまでは1例も現れない。つまり年を表示するのにサイクルを利用するという至極便利な方法は、上古時代において使用されていなかったのは明らかである。年を60のサイクルに従って表示する最初の試みは司馬遷『史記』に見いだされる。それは閏年を明示する目的で組み立てられた表であり、76年間連続している。その最初の年は紀元前103年である。しかし、司馬遷はここで中国の伝統的サイクル(干支)を用いずに、二シラブル(2字)と三シラブル(3字)の語(コトバ)を用いている。それらは中国人の観点では「夷狄のコトバ」と考えられるはずのものである。ここで最初の13年間の名前を挙げよう。おそらく、古代インド語に精通した方が将来これらを説明できるであろう。それぞれの歳名の第二語は木星の運行と関連している。司馬遷は、第1年の“摂提 (Shehte セッテイ)”は木星を意味すると述べている。注釈者はこれに対して次のように説明している。木星は東方に属する。木の精である。青帝の霊でありその名は

“靈威仰 Ling-wei-jang” という。この語（コトバ）は意味不明の三シラブルから成る6つの神名の一つである。これらは漢代に、北極および五つの主要な神（帝）に当てられた名前である。これらも当然、漢語以外にその起源を求めなければならない。北帝と五帝は以下のような名前を持っている。

北帝 耀魄宝  
 青帝 靈威仰  
 赤帝 赤熛怒  
 黄帝 含枢紐  
 白帝 白招矩  
 黒帝 叶光紀

“攝提格” という語に対してさまざまな解釈がなされた。（広東語では *Shipt'ai kak* と発音する。*Shipt'ai* は木星に対するインド語の呼び名 *Vrishaspati* を表記したものではないだろうか？ また *kak* はインド語のサイクルを意味する *chakra* からきているのではないだろうか？）この語は司馬遷の歳名表の第一年に当てられ、それを見ると、十二支のどの一つに対応するかについて決めることができる。司馬遷は、攝提は木星であると言っている外に、また、それは木星の黄道上における位置を意味する、とも説明している。さらにまた彼は別のところでは、奇妙な矛盾があるのだが、それはおおぐま座の尾（北斗星の柄）が指すところの星あるいは星座である、とも言っている。「星経」という文献では、攝提は西方の国々の靈的道具 (*spiritual instrument of western nations*) であると説明されている。歳名についてのはっきりした認識がなく混乱している状況は、もし以下のように想定するならばよく納得できる。一巡60年のサイクルという方法はインドから伝来したもので、また司馬遷の時代には他のもっと重要なことがらもインドに負っている。歳名表は司馬遷の著述ということになっているが、実際は（歳名と木星紀年法の形成に）複数の人が関与したはずである。

彼らは、木星の運行が天上の十二支の進む向きと逆になっていることに気づいた。そこで逆向きの（木星の運行と一致させる）方法を考え出した。つ

まり、木星が東の地平線上で日出前に見える時の月名（の十二支名）を使う方法である。紀元前103年は、木星は第1月（正月）に夜明け前地平線上に昇る。正月は寅月だから、この年を寅年とする。翌年は卯月に地平線上に昇るから、よって卯年とする。こうすれば木星の運行と十二支は、年を表示する際に、順に対応することになる。よって十二支による年表示が成立した。ところがその後の年代学者は寅を誤って丑とした。この過ちは、おそらく『史記』の“歳は丑にあり”という記事を読み誤ったためであろう。（ここでジョン・チャルマーズは『史記』と『漢書』の矛盾について触れている。本稿はこの問題には触れない。）しかし、もしこれが間違いの理由だったのなら、彼らは次の事実を見落としたことになる。（「天官書」は続いてこう書いている）その翌年、木星は子にあり、さらにまたその翌年は亥にある。このように十二支の終わりの方から逆に進んで行く。彼らはその表現を正しく理解できなかった。オリジナル（「天官書」）はこういう言い方をしている。攝提格の年に、歳陰は左に移動し、寅にあり、歳星（木星）はそれと逆の方向つまり右に移動し、丑にある。この“陰”はその意味がはっきりしないので翻訳がむづかしい。おそらく、木星の反転かあるいは対をなすものの一方を意味するのだろう。古来、中国人は次のような表現を好む。“歳は甲子（干支）にあり。”しかしこの句の意味を説明した人はほとんどいないようだし、また、上に述べた『史記』の記述にその起源があるということを知っている人もほとんどいないようだ。ましてや、その“歳”は歳陰の歳なのか、歳星の歳なのかを知っている人はもっと少ない。この表現は、ただ干支を使いたくて「甲子（干支）にあり」と言っているに過ぎない。

それまでもつぱら日を表示するために用いられていた干支60のサイクルがまもなく、「曆書」に見える）長ったらしい名前にとって代わった。しかしこの交代がいつ起こったのかに関してはいくつかの説がある。『史記』の「年表」（紀元前840年から始まっているが）に記されている年の干支は、後代の人が書き入れたものである。

（ジョン・チャルマーズ「古代中国の天文学について」）



私はこの記述の後半部分を読んだ時、ジョン・チャルマーズは馬王堆帛書「五星占」を知っていたのではないかという錯覚をおぼえた。私はこの記述から啓示を得て、帛書「木星占」から木星の運行と十二支の対応関係が成立したゆえんを悟った。

歳名や歳陽は明らかに外来語の音写である。また本来、木星占星術で使われていた語である。私はインドの木星占星術が中国に伝わったと考える。チャルマーズはそれらの語の音からインド起源を推定したに過ぎなかった。しかし、「曆書」に記録された紀年法の起源がインドにあることは確かである。木星が天上を1周する周期はおよそ12年だから、古代には木星が居る位置によって年を表示する方法が広く行われたようだ。このやり方は、木星占星術に起源があるのは言うまでもない。古代中国では、天上を12に等分し、それぞれに名称を付け、その名称で年を表示した。この12区分は「十二次」と呼ばれた。(図2参照)そして地上世界もそれに呼応して12に区分けされ、各区域は天上の12区分それぞれに配当された。そして木星がいま居る次(じ)に対応する地上の区域の吉凶が云々されるのである。

六世紀のヴァハラ・ミヒラが伝えるところによれば、インドの木星周期法には2種類あった。一つは12年周期、もう一つは60年周期で、これは12年周期を五回繰り返すやり方だ。つまり中国起源の干支と同じ仕組みである。また各年はそれぞれ歳名を持っている。12年周期法の歳名は、木星と一緒に地平線下に没するあるいは上に昇る星座名を用いて名付ける。例えば、星座「昴」と一緒に昇る年は「昴年」であり、星座「畢」と一緒なら「畢年」というふうに。またそれぞれの年を司る神が決まっている。これらの関係は以下のようになっている。

	年の名前	対応する星座	年を司る神
第1年	Cartic	Critica, Rohini	Vishnu
第2年	Agrahayan	Mrigasiras, Ardra	Surya
第3年	Paush	Punarvasu, Pushya	Indra
第4年	Magh	Aslesha, Magha	Aguni
第5年	Phalgun	Purva, Phalguni, U-Phalguni, Hasta	Twashta
第6年	Chaitr	Chitra, Swati	Ahivradna
第7年	Vaisach	Visacha, Anuradha	Putris
第8年	Jaishth	Jyeshtha, Mula	Viswa
第9年	Ashar	P-Ashara, U-Ashara	Soma
第10年	Sravan	Sravana-Dhanishtha	Indragni
第11年	Bhadr	Satababisha, P-Bhadrapada, U-Bhadrapada	Aswina
第12年	Aswin	Revati, Aswini, Bharani	Bhaga

(ブレナンド『インド天文学』<sup>(22)</sup> (英文) P. 155)

この状況は、中国の木星紀年法と同じである。ただ、ここに見えるインド語と、『史記』などに見える攝提格や単闕などと直接的に関係があるかどうか半断できない。しかし、インドの木星占星術のやり方はそのまま中国へ伝わったと考えられる。それを証明したのが、近年発見された「五星占」である。

### 馬王堆帛書「五星占」

上に挙げたインドの「木星12年周期表」と同じ構造を持つ占星術（紀年法でもある）が近年中国で発見された。それが馬王堆帛書「5星占」である<sup>(23)</sup>~<sup>(26)</sup>。馬王堆3号墓から「五星占」を含む大量の文字資料と画像資料が発見された。3号墓の年代は、ここから発見された文字資料によって紀元前170年ころであることが分かった。だからここから発見された資料は戦国時代から秦朝までの思想、社会制度、宗教、天文学およびこれと関連する占いなどを反映していると考えられる。ここから発見された帛書「五星占」はまさに「曆書」に記録された紀年法の原型である。以下、これを現代語に訳して紹

介する。(帛書「五星占」の写真は『馬王堆帛書芸術』に掲載されている。)

### 「五星占・木星占」

東方は木、その帝は大昊、その丞は句芒、その神は天上で歳星となる。歳星が居る分野に相当する国は、歳星がその一年をつかさどる。

第1年。歳星は正月に宮室と共に、日出前に東方に出る。その年を名づけて攝提格という。

その翌年。2月に東壁と共に、日出前に東方に出る。その年を名づけて単闕という。

その翌年。3月に胃と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて執徐という。

その翌年。4月に畢と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて大荒落という。

その翌年。5月に東井とともに日出前に東方に出る。その年を名づけて敦牂という。

その翌年。6月に柳とともに日出前に東方に出る。その年を名づけて汁洽(協洽)という。

その翌年。7月に張と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて涒灘という。

その翌年。8月に軫と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて作鄂という。

その翌年。9月に亢と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて闍茂という。

その翌年。10月に心と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて大淵献という。

その翌年。11月に斗と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて困敦という。

その翌年。12月に虚と共に日出前に東方に出る。その年を名づけて赤奮若という。

その翌年。正月に宮室と共に日出前に東方に出る。そしてまたもどって撰提格となる。12年周期で繰り返す。

## 原文

歳星以正月与宮室晨出東方其名為撰提格  
其明歳以2月与東壁晨出東方其名為単闕  
其明歳以3月与胃晨出東方其名為執徐  
其明歳以4月与畢晨出東方其名為大荒落  
其明歳以5月与東井晨出東方其名為敦牂  
其明歳以6月与柳晨出東方其名為汁給（協洽）  
其明歳以7月与張晨出東方其名為涒灘  
其明歳以8月与軫晨出東方其名為作鄂  
其明歳以9月与亢晨出東方其名為闍茂  
其明歳以10月与心晨出東方其名為大淵献  
其明歳以11月与斗晨出東方其名為困敦  
其明歳以12月与虚晨出東方其名為赤奮若  
其明歳以正月与宮室晨出東方復為撰提格12歳而周。

（「五星占」はこの後、木星占星術の占文を記している。）

これを見てまず気づく大きな特徴は、中国人が偏愛するところの干支が全く使われていないことである。（『淮南子』や「天官書」にも、似た記述がある。ただ重要な点が違っている。）

これは、インドの12年周期法と同じ仕組みである。そして撰提格などの歳名はどう見ても外来語である。よって、歳星紀年法はインドに起源があることは明らかである。ところで中国には、天上の12の名称として「星紀」「玄枵」などのいわゆる「十二次」があった。『国語』『春秋左伝』にはこの中のいくつかの名称が出てくるから、遅くとも前七世紀ころには成立していたと考えられる。ただ十二次の場合は、単に木星がどの星宿に位置しているかだけが注目された。しかしインドの12年周期法は、木星が明け方、どの星宿と一緒に見えるかという点に注目している。観測がより精密になったためであ

る。

「五星占」の歳星紀年法の仕組みがインドから伝来したことは間違い無いが、撰提格などの用語がインドから来たと証明することは困難な状況である。そこで、チベット語起源を主張した人がいる。

### 大西正男の「歳陽歳名チベット語起源説」<sup>(27)</sup>

歳陽歳名の仕組みは古代インドの木星紀年法に由来するが、これらの語がインド語の音写であると証明するのは、無理なようだ。もう一つ有力な可能性はチベット語起源である。大西正男は、闕逢や撰提格などはみなチベット語の音写であると考え。現在、チベットと言うと我々は中華人民共和国のチベット自治区を考えるが、古代のチベット文化を考える場合は、チベット高原全体がその文化圏に入る。青海省や甘粛省はもちろん四川省の西半分もその文化圏である。またチベット文化はインドの影響を強く受けている。だからもっと大きく見ると、インド文化圏とも言える。こういう状況を考慮すると、歳星紀年法はインドに起源があるのだが、チベット民族が媒介役を果たして、中国東部の民族に伝えた可能性は非常に強い。大西氏はこう述べている。

なおチベット語に思い至ったについては、更にいま一つ理由がある。漢の武帝が太初元年（前104年）改暦に当たり、命ぜられて顛項曆を改めて太初曆としたのは方士の唐都と巴郡の落下閔の二人であった。前者は天部を分ち、後者は運算転曆を行ったという。前者は楚の史の家の出であり、後者は蜀の巴郡の閬中の人という。両者は何れも江南またはそこにゆかり深く、チベット文化圏またはこれに近い地域に居住した人であったことである。（鳥居龍蔵氏によれば、1900年代に入っても、四川省成都の山・峨眉山にはチベット族はたくさん住んでいた。）

また『漢書』第28卷上「地理志・蜀郡」に

恒水は蜀山から出て、その西南、羌族の間を流れるとあり、王先謙は補注で、蜀山は岷山に作る、岷蜀は一なり、という。それでは恒水は岷江であり、その西南羌中に入ると云う。羌はチベット系といわ

れる西羌をさすのであろうか。

(大西正男『十干十二支の成立の研究』)

大西氏はこう考えて、中国の「歳名」は12の動物のチベット語を音訳したものだと言った。そして「歳名」の古代音と、動物の名前のチベット語を比較した。ここではその最初の3つだけを紹介する。

### 太歳名 漢蔵語音対照表

太歳名 (歳陰名)	周・秦・漢代音	チベット語十二獣名		
		文 語	西寧方言	語意
撰提格	siapd'ieg kāk	stak'	htax	虎
単闕	d'ien at	ri pong	ri-wop	兔
執徐	tsjep dajo	a't'am seng	'dam sau	獅子

(前掲書204、205頁)

私はチベット語について何の知識もないから、大西氏のこの研究の内容について論評できない。しかし当時の歴史状況を考えると、チベット遊牧民が東西文化の交流に大きな役割を果たしたことは間違いない。今後、チベット語に造詣の深い方がこの方面について研究を進めてくださるよう期待する。

ところで屈原「離騷」に“撰提(格)”という語があり、『呂氏春秋』に“涪灘”という語が記されている。屈原は紀元前四世紀に生きた人物である。だから遅くともこの時期にはインドの木星占星術が中国に入ってからかなり流行っていたと考えられる。また秦朝の呂不韋が編集した『呂氏春秋』にも使われているのだから、この時期には広く普及していたのは間違いない。私は、インドからまず四川省に伝わり、さらに長江沿いに東に伝播し楚の地に入ったと考える。文献および近年発見された文字(あるいは画像)資料によれば、戦国時代には戦争に関する占いが相当流行ったことが分かる。この風潮に応じてインドの木星占いが取り入れられて広く普及したのだろう。中国古代の天文暦法や占い方面の記述を見ると、外来語がたくさん入ってきているように思われる。占いの世界では、ありふれた日常の語よりは、新奇な語や訳の

分からない語の方が好まれたのではないだろうか。

## 楚に入ったインド文化

インドの文化が楚の地に入っていたことについて、先人はすでに指摘していた。安倍道子は藤田豊八の説を承けて、『楚辞・天問』の中の次の3つの伝説はインドに由来すると考える。（「楚の神話の系統に関する一試論」<sup>(28)</sup>）

### 1. 羿が太陽を射落とすという話。

「天問」に“羿焉弾日、烏焉解羽”という句がある。羿はどのようにして日を射落とすのか、カラスはどのようにして羽が解き離れるのか、という意味である。これとほとんど同じ話は『リグ・ヴェーダ』にあり、明らかにインド伝来と考えられる。ただ、『リグ・ヴェーダ』では鷲が太陽を運ぶ話になっているが、インダス流域のハラッパ遺跡で発見された陶器の装飾画像には、孔雀のような鳥が太陽を背負っているように見える。（『世界考古学大系』第八巻）それはともかく、鳥が太陽を運ぶ図は四川省や河南省南陽の画像石画像磚によく見られる。これはインドに起源がある。しかし太陽とカラスとの結びつきは中国に起源がある。太陽の黒点の存在に気付いた古代中国人が、太陽にカラスが住むという神話を創作した。これらインドと中国それぞれに起源を持つ神話が、戦国時代に楚の地で結合し、カラスが太陽を運ぶという神話が出現した。ただし、漢代の画像に見える、太陽を運ぶ鳥はどうみてもカラスには見えない。

### 2. 亀が山を負う、という話。

「天問」に“鼈戴山抃、何以安之”という句がある。鼈（亀の一種）が山を背に負って、ぐるぐる回るあるいは揺れ動く、どうしてこれを安定させることができるのか、という意味である。これはインドの『マハーバーラタ』に見える次の話に由来する伝説と考えられる。“神々が集まって海をかき回して不死の靈液を作ることを決め、高山を抜いて海岸へ運び、諸天の最大の Indra がそれを亀王 Kurma の背に乗せて攪海の棒として海を攪拌すると明月・天女・不死の靈液等が出てきた。”

安倍道子はこう述べている。“この神話は、山を負う亀というモチーフが

『楚辞』と共通であるばかりではなく、もし先の「天問」の句の「抃」が藤田豊八氏が言われる如く振盪する意であるならば、山を負った亀がクルクル回っている、という点も共通することになる。”

### 3. 月にウサギが住むという話。

「天問」にこういう句がある。“夜光何徳、死則又育、厥利維何、而顧菟在腹”。この句はこういう意味である。夜光（月の光）は何の徳があつて、死んでもまた生き返るのか、その利はいったい何であるか、しかも、顧菟はその腹に居る。

この中で問題は“顧菟”である。従来この語はウサギを意味すると解釈されてきた。しかし聞一多がこの解釈の間違いを正した。中国で古い時代に月と結びつけられた動物はカエルであつた。カエルには蟾蜍という漢字が使われた。ところが『リグ・ウェーダ』によれば、古代インドでは、ウサギは月の中の形象と考えられていた。この伝説が楚の地に入り、中国古来の「蟾蜍」の伝説と会合したとき、楚の人は蟾蜍を顧菟と表記した。蜍と菟の音はおそらく同じだつた。そして戦国時代の晩期には、月にカエルとウサギが住むという伝説が形成された。馬王堆帛画の月の画像にはカエルとウサギが描かれている。しかし、ウサギはそこではただ駆けているだけである。ところがその後まもなく、ウサギが「不死の薬をつく」という伝説（これもインド起源の可能性がある）がこれと結合し、後漢時代には、ウサギが月の中で「不死の薬をつく」図が画像石などに好んで描かれるようになった。ところが、この伝説が日本に入ると、なぜかウサギが「餅をつく」図になった。

チベットは、たしかに中国の影響が強いけれども、文化面ではやはりインド文化圏に属する。そして四川省はチベットと接している、あるいは半分はチベットであると言ってもよい。古代インドの文化はまず四川省に入り、そして長江沿いに東に波及し楚の地に入った。



## 天文と暦日の情報によって誕生日を確定する

屈原は「離騷」の中で自分の誕生日についてこう述べている。

“攝提格の年、正月庚寅の日”

この記述と帛書「五星占」から得られた情報を結合すると、その日を確定できる。攝提格の年は「五星占」によれば、木星が正月に宮室（ペガサス $\alpha$ 星）と共に日出前に東に見える。つまり木星がペガサス $\alpha$ 星の近くにあり、太陽がその少し東に位置する時である。そして旧暦（夏暦）正月で、日の干支は庚寅である。また、屈原が生きた時代は楚・懷王の時代であるから紀元前四世紀中ころに生まれたはずである。

これだけの情報があれば、天文ソフトを使って天象を再現し、具体的年月日を確定できる。実際、この作業をやって以下のような結果を得た。

### 屈原の誕生日

紀元前340年（夏暦）正月8日庚寅の日（西暦2月28日）。

この年は楚宣王30年に当たり、そして宣王はこの年に死去した。

この年の正月ついたちの天象を参考図として掲げる。（図3）

屈原の誕生日が確定した今、先人の研究を振り返ってみると、郭沫若の研究はその方法が間違っているにもかかわらず、得られた日付は一致している。その理由を考えてみたい。彼は機械的に木星周期を12年として推算した。ところが、それで得られた前341年の正月には庚寅の日がない。そこで1年跳ばして前340年とした。これが正しい年だと知った今、次の事実が明らかになった。始皇帝8年と屈原が誕生した年の間では、12年周期とした場合にくらべて、実際の木星は1年分早く動いていたということである。このずれを確認できたことによって、当時の木星占星術は機械的に12年周期としていたのではなく、実際の木星の位置に依っていたことが分かる。実際、始皇帝8年の天象を天文ソフトでシミュレートしてみると、「五星占」に記されている“涖灘”の年の歳星の位置と合っている。今の例では始皇帝8年と屈原誕生年の間は百年であるから、ずれが1年だけだったので、郭沫若の方法でも正しい年を求めることができた。しかしもし両者の間隔が数百年あった場合

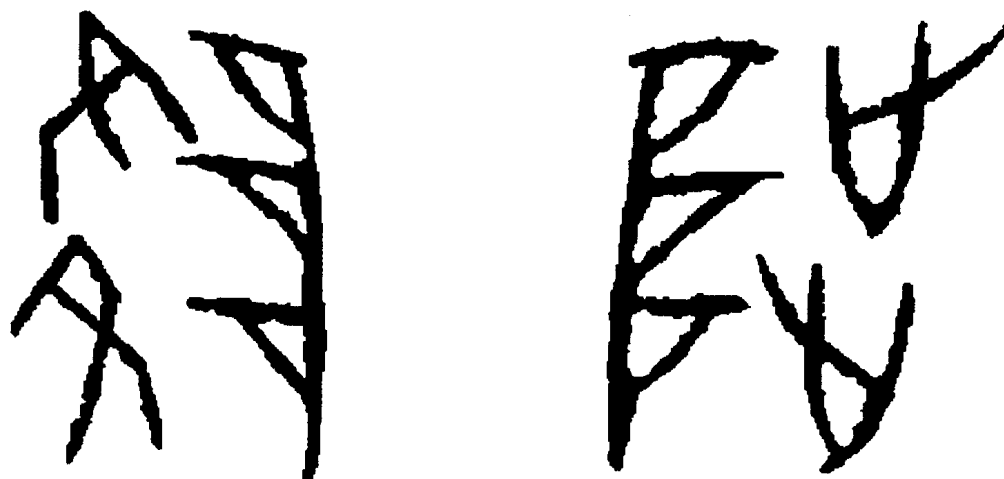
は、確定出来ない。

彼の方法は、そもそも木星の運行を十二支と結び付けたところが間違いであった。当時（戦国時代）はどこまでも木星が天上のどこにあるか、その位置によって歳名がきまった。木星紀年法を十二支紀年法と同じに理解したところが間違いだった。実はその間に一年のズレがあった。「歳星超辰」は木星紀年法から十二支紀年法に移行して、長く使用していくうちにズレが生じるのである。まだ十二支紀年法が出現していない時代を考えているのに、「歳星超辰」を持ち込むのは、全く理屈に合わない（間違っている）。郭沫若は、日の干支“庚寅”が合わないので一年ずらしたのだが、もしこの“庚寅”という情報を我々が持っていなかったら、彼は当然、前341年を生年としたはずである。

文献

- (1) [清]王夫子『楚辞通釈』中華書局 北京 1959
- (2) 目加田誠『屈原』岩波新書 1967
- (3) F. テーケイ『中国の悲歌の誕生—屈原とその時代—』  
(羽仁協子訳) 風濤社 1972
- (4) 藤野岩友『楚辞』(漢詩選3) 集英社 1996
- (5) 目加田誠訳『詩経・楚辞』(中国古典文学大系) 平凡社 1969
- (6) 小南一郎『楚辞』(中国詩文選6) 筑摩書房 1973
- (7) 董楚平『楚辞訳注』上海古籍出版社 1986
- (8) 饒宗頤、曾憲通『楚帛書』中華書局香港分局 1985
- (9) 李零『長沙子弹庫戦国楚帛書研究』中華書局(北京) 1985
- (10) 劉信芳「楚帛書解詁」『中国文字』新21期 藝文印書館  
台北 1996.12
- (11) 成家徹郎「大火暦」(中国語、李権生訳)  
『平頂山師專学報・哲学社会科学』第10巻2期 1995.06
- (12) 成家徹郎「商王朝西周王朝の実年代」  
『日本中国考古学会会報』第九号 東京 1999.10
- (13) 周祖謨撰『爾雅校箋』江蘇教育出版社 南京1984
- (14) 曲徳来「屈原の身分と生年の再検討」『文史』第四二輯  
中華書局 1997.01
- (15) 曲徳来『屈原及其作品新探』遼寧古籍出版社 瀋陽 1995
- (16) 聞一多「古典新義・離騷解詁」『聞一多全集』第2巻  
NAM TUNG STATIONERY&PUBLISHING CO. Hong Kong  
発行年表記無し 編者郭沫若の跋1947年
- (17) 郭沫若「屈原考」『楚辞研究論文選』湖北人民出版社 1985
- (18) 陳久金「屈原生年考」『社会科学戦線』1980年2期
- (19) 浦江清「屈原生年月日の推算問題」  
『楚辞研究論文集』作家出版社(北京) 1957

- (20) 湯炳正『屈賦新探』齊魯書社 濟南1984
- (21) John Chalmers, on the Astronomy of the Ancient Chinese,  
in The Chinese Classics Vol. III, part 1, London 1865  
同上中国語訳  
「中国古代天文学考」(向達訳)『科学』第11卷第12期 1926
- (22) W. BRENNAND, HINDU ASTRONOMY, First Reprinted 1988,  
CAXTON PUBLICATIONS, Delhi
- (23) 「馬王堆漢墓帛書五星占釈文」  
『中国天文学史文集』科学出版社(北京) 1978
- (24) 川原秀城、宮島一彦「馬王堆帛書五星占訳注」  
『新發現 中国科学史資料の研究』京都大学人文科学研究所 1985
- (25) 陳松長『馬王堆帛書芸術』上海書店 1996  
(「五星占」のカラー図版が収録されている)
- (26) 陳久金「馬王堆帛書〈五星占〉から、我が国古代の歳星紀年問題を考  
える」  
『中国天文学史文集』科学出版社(北京) 1978
- (27) 大西正男『十干十二支の成立の研究』大西先生論文発刊会 高松 1975
- (28) 安倍道子「楚の神話の系統に関する一試論」  
『中国大陸古文化研究』第7集  
中国大陸古文化研究会 慶応義塾大学 1975.07
- (29) 『世界考古学大系』第8巻「南アジア」平凡社 1967



a. 「降」

b. 「陟」

図1 甲骨文の「降」と「陟」

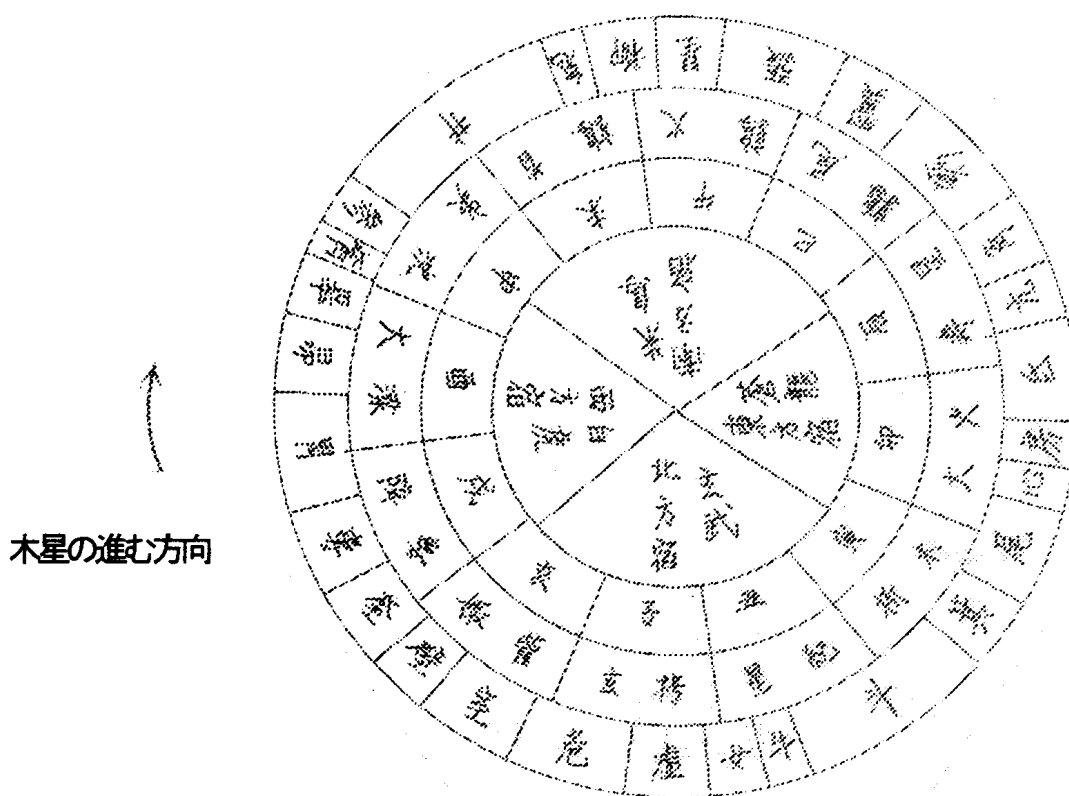
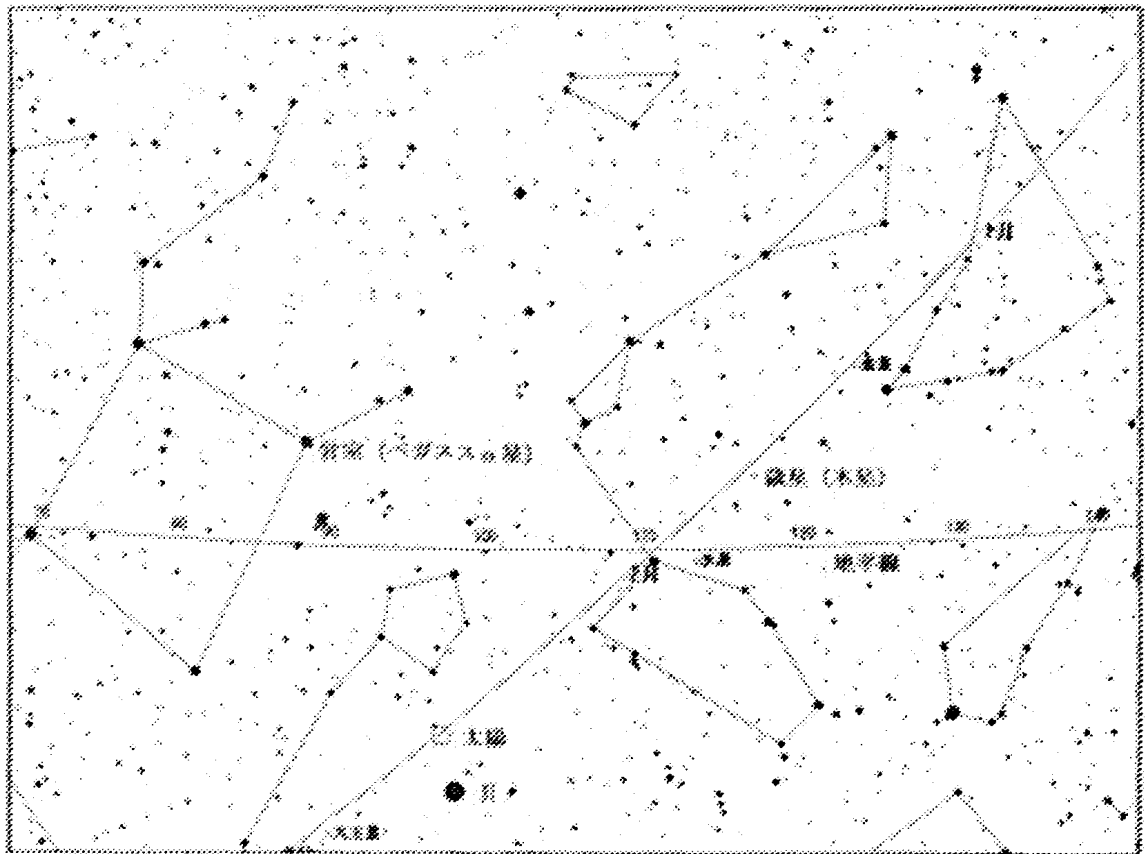


図2. 十二支十二次対応図



Astronomical Software FIRST LIGHT, AI SOFT, JAPAN, 1996

図3. 攝提格の年 (340BC) 正月の天象

屈原が生まれた日は紀元前340年の正月八日庚寅の日（2月28日）である。  
 上図は正月ついたちの夜明け前東方の天象図である。馬王堆帛書「五星占」にこういう記述がある。  
 “歳星は正月をもって宮室と共に明け方に東方に出る。この年の名を攝提格という。”